

結果によって確かめられる

(ピリピ一・二七〜三〇)

十年一昔「ミスター・ストイック」と言う名で売り出されていた格闘家が居た。格闘技界のレジエント、黒崎健時の道場に弟子入りするも、そこにはスパーリング・パートナーはいない。あるのは早朝の腕立て伏せ千回や、二時間に渡るサンドバッグ蹴り、果ては八〇キロのリュックを担いで十キロウォークなどの体力トレーニングの数々と線香をこぶしに焼き付けるといふ精神修養であった。将にストイックである。だがその年の戦績は三勝四敗。ストイックなのに結果が出ない彼に何とも言えない「イタイ」感じがしたのは私だけではあるまい。

閑話休題。今朝の個所で使徒パウロはピリピのクリスチャンに福音に相応しい生活をするよう命じているが、それを具体的に説明はしていない。寧ろ彼は福音に相応しく生きるなら、どのような生き方が生まれてくるだろうという「結果」を教えている。「木は実によって知られる」を地で言っている。以下、福音に相応しい生活が産みだす三つの実について考えたい。

一、人の顔色をうかがわない

ピリピ教会の信徒にとつて、パウロは間違いなく「師」であった。師の存在の有無が彼らの信仰生活に影響を及ぼすと言うことはよくあることである。小学生の時のことを思い出してみよう。始業のチャイムが鳴ったら、本来は先生が来ようが来まいが着席していなければならぬのに、二分三分と時が経つと騒いだり、立ち歩いたりしたことはなかっただろうか。人間と言うのは人の目が無いとどうしてもだらけやすいものである。しかしパウロは福音に相応しい生活というのは人の存在の有無によつて左右されるものでは決してないと主張する。それはそうだ。彼らの生活の基盤はパウロと言う人ではなく、キリストの福音に立脚しているのだから。ある学者は二七節を「天国の市民としてふるまいなさい」と訳しているが、これは示唆的である。パウロとの関係を問わず彼らは天国の市民であり、そのゆえにどのような状況にあつても他者の顔色を伺うことなく神のために生きることを追求するようにパウロは求めているのである。

二、真理に立ち、福音の為に奮闘する

次にパウロは福音に相応しく生きている者はしっかりと立ち、福音の信仰の為に

奮闘するものになると語る(二七節後半)。

まず「しっかりと立つ」であるが、これは様々な困難の中にあつても立ち続ける人間の姿を想起させる。實際次の節に示されているようにピリピ教会は他の初代教会と同様に反対者に囲まれていた。無理解や迫害に直面していたのだ。しかしそのような中にあつてもキリストの福音に相応しく歩もうとする者は、一つの霊によつて(新共同訳)、堅く立つことが出来るのである。次に「奮闘する」であるが、これはより動的なイメージのあることばである。キリストの福音に相応しい生活はそもそも活動的だ。その理由は簡単である。福音、良き訪れは本来的に伝えられなければならないメッセージだからである。ゆえに真に福音に触れ、そのいのちにあずかる者は信仰のために労を惜しまない者になるといふ実を結ぶのである。

三、キリストの苦難を進んで負う

二九節においてパウロはキリストの福音に相応しい生き方がよい実を結ばせる根拠について語っている。それがクリスチャンはキリストを信じる信仰と同時にキリストのための苦しみを賜つているという事実である。「信仰者はキリストと一つとされている」というのは聖書が宣言していることであり、私たちも良く聞くところ

あるが、よく考えて行くなら真にキリストと一つになつたと言ふことは彼の喜びに与るだけでは不十分である。夫婦が一つであることは「その健やかなる時もやむ時も」と言うように喜びも悲しみも分けあつて居る時に確かめられる。同じようにキリストの福音に相応しい生活をしていくとき、苦難を負ふことはある意味避けられない。しかし主にある者はそれを喜びに変えることが出来る。そこで主と一つとなつて居ることを体験できるからである。

* * *

「太郎、お前が飲まないのはよく分かつた。だつたらTさんのようになれよ」と酔眼の先輩から言われたことばを忘れることが出来ない。このTという先輩はクリスチャンであることを公言し酒を遠ざけてはいたが、コンパには皆勤で気分の悪くなる後輩たちの面倒をよく見ていたと言ふ。そうなれと言ふのだ。根が素直だつたせいにか、この言葉が妙に響き、結局私も素面で酔漢に付き合う大学時代を過ごした。それから幾星霜。T先輩は台湾への宣教師として活躍され、現在は恵比寿にある国際教会で牧会し真理のために奮闘している。彼の「救い」は確かにその実によつて確かめられている。私たちもそうありたい。